

煌け! 登美北

平成27年10月14日(水)
奈良市立登美ヶ丘北中学校
生徒指導だより
文責：三間瀬 充宏

登美北の二大行事が終わりました

振り返れば、2学期が始まってからは文化祭の準備や応援の取組で毎日が全力で走っているように感じられる慌ただしさだったのではないのでしょうか。でも、その苦労があったればこそ、文化祭・体育大会をやり終えたとき、何とも言えない満足感・充実感が得られたのだと思います。これからの学校生活にこの経験を活かし、充実した日々を過ごしてください。

とにかく人のために・・・

15日(木)・16日(金)に中間テストがあります。テストに向けて頑張っていることと思いますが、そんなみなさんを力づけるような報せ(5日・6日連続して日本人のノーベル賞受賞)が飛び込んできました。これでノーベル賞受賞者は24人になりますが、2000年以降だけに限ると、16人は世界で2番目に多く、日本のすごさを実感すると同時に、学ぶことの大切さを改めて教えられたように思います。

特に、大村智さんはアフリカの熱帯病オンコセルカ症(河川盲目症、推定2千万人の感染者)に効果のある薬品「イベルメクチン」を開発して、WHOを通じ、アフリカや中南米など10億人の人達に無償で提供できるように力を尽くしました。祖母の言葉「とにかく人のためになることを考えなさい」を忘れず、「分かれ道に来たときはそれを基準に考えた」と述べておられます。他にもみなさんにとってとても意味深い言葉を数多く語っておられます。そのうちの一つをここで紹介したいと思います。

■「楽な道、楽な道を行くと本当のいい人生にならない」

『山梨大学を卒業して東京都立墨田工業高校定時制の教師となった大村さん。働きながら懸命に勉強する夜間の学生の姿に感銘を受けたと話す。「夜間の工業高校だから、近隣の工場から仕事を終えて駆け込んできて勉強する人がほとんど。あるとき期末試験の監督をしていると、飛び込んできた(生徒の)一人が、手に油がいっぱいついてた。私は一体何なんだ。ショックだった。もっと勉強しなきゃいかん。本当の研究者になろうと思った」。昼は東京理科大学の大学院、夜は教員、夜中に次の授業の準備をする日々は過酷で、妻に「やせ衰えて半分病人のようだった」と言われたというが、スキーの長距離に比べれば「まだ楽だと思ってやっていた。』(THE HUFFINGTON POST より)

大村さんが教師になった1958年は巨人の長嶋茂雄選手が4打席4三振デビュー、東京タワーも完成して、日本が戦争の傷跡から抜け出し高度成長時代に入る時期でしたが、高校進学率は53.7%で、多くの人が経済的な理由から高校に進学できませんでした。そんな人達が学びの場として選んだのが夜間高校です。そこでは一日の仕事を終えて疲れているにもかかわらず真摯(しんし)に学ぶ生徒の姿がありました。それに心を打たれた大村さんは研究者への道を歩み始めます。一生懸命に頑張る姿には人を動かす力があるのですね。

ラグビー日本代表が残したもの

ラグビーW杯で日本は3勝1敗の好成績を残したにもかかわらず、決勝トーナメントにポイントの差で進むことができませんでした。しかし、日本代表が今回遺したものはとても大きかったと思います。日本ではラグビーへの注目度はあまり高くありませんでした。だから、南アフリカに勝ってから応援し始めた人も多かったのではないかと思います。私もそんな一人でしたが(前大会まで1勝2敗2分で今回も勝つことは難しいと思っていた)、その後の試合や練習風景など観て、代表選手がどれほどの思いを持って頑張ってきたのかを知ると、2019年W杯の日本開催がとても待ち遠しくなり、そして、頑張れば歴史を変えられることを教えてもらったことにとっても感謝したい気持ちになりました。

みなさんには多くの可能性があります。日本代表が見せた「歴史を変える」ような意気込みを持って未来を創って行ってください。お家の人や先生、地域の人はそんなみなさんを応援しています。

最終下校時間が16日(金)から5時になります

これからは日の沈むのが早くなり、5時でも暗くなります。下校のときはなるべく複数で真っ直ぐお家に帰るようにしましょう。